特別
へ13
3206

本甚

特 13 門へ 8 號 3206 巻

へ9 4254

昭和九年十月八日 購求

為法時事を
小児の気をうんくお）てるを。一時の熱さ
を知て。主人其病状を考るを考ずんで也。
傍人の教を聴てう風さかるべ。母の
法母を知て。彩の治る事を考ずん
ハ也。父母小児を考るべ。治法
かたくせるべ彼熱を中たる者今
雷原氏が此書を見て傍人を
ゝるべ。滑稽を以て傍人を

なほ法華。教ふる古人の道は心角なるを。
少しも誘ふ。偶切角ふ。或は貪くも長く
も短くも。流れ貫の如の如く。或は深き
深淵ふるるて。波人この心まる場。はは
甘泥路樹をかぐつく。如来の執を忘れ
よと云。面白く吉旦風東山人法

安来

句の序
東陽子伯代源遠傳銭塚をすむ戸縁
大源公墓乃つ年ふ紀れ大きん玉戸塚の墓
ふ伝もとふ神ふ釈仁の薄ちれ中ふ角
和ち乃墨代よあ中て伝由を翻京伝諸戸社
栗し伯表ふ新代の墓神面の墓ふ状伝を
ふ半一貫と称し伝をふ毎民といく薬以時
ふ当ふて方ちを本伝ふ求ふ寛成銭ふ
河ふ拔さふ河を方ふ方ふ方ちきと伝ハ

百の細毛を手本強更子を手にして作者書屋
を硯の形乃出来形を特の高低を寸分
を男性と嘱乃嘱と家を東ひ方のやうに
あり付て扨撫乃せめハ変かゝ水手元の
りを立てゝハ形ハ作者屋
時和改元秋八月東京作自序

西洋道中膝栗毛目録

栗和里先生之巻　上下

取留無清之巻

馬糞先生之巻

塵世通法師之巻

大森義之巻

第四

蒹葭堂主人伝輔之篇　附薩摩屋

龜山丈人之篇　附三宅翁

あの世を見る孫四郎

水流雲行第三之上

桑和里先生之篇

おもふ事なかれ。なほ事の如の樂業。我世をゆく身の
源小利を求神てゝかるゝ。車で引く
鈴ばかりされば濁世の世かまる私線。お菓の品
の世ぐるを濁る事ばかり。松山堂のかさだを
みる抜。法ぐるも変ず動き出で。武藤の素
張ばかりか。疑ふも世間の物ばかり。俗の向ふ
外る古ぬめ。沈日市小新町の街道を始あげ小粉ふ
ゝ。濁せち濁宵ふて。濁ぐ男のをとゝすて

行年のはよ年未の秋うさるふても押の新されぬ
命ひとつ當年のまうけ物と云事か何とぶる
緒のぶいる。六十五年の貧ふ和山湊ふ所ぶる
うとふとへ。サア世ていとてからいていハ今ゆう。十二月
毎日の晩菜ふなつて人しの新色青菜ふ物を拵へ
魚たるぶとく。世ぶ先て事ハ異ふ事ハ才松と事ハ。四五月の頃
うらぬけて涼ふる秋いくぶ形くぶ。ふ行不の花柳ぶ
ふぬも。お知人方のお掛ぶ出ふやぬも。高ふハ物入ぶる
ハ病ふと思ふて諸れ法ふる事ハ出来か私の身れむ
ぶうふち。うらやふ形ふかくて。ふふの夜ぶくくする

用。ふの夜ふくふ河の神法紀さんくくふ夜ふ掛ふ
もコンと持ふらす ふのかふ私ふ尾からげして弓法桃
灯持て。文王の山紀ふ紀虞芮の表紀ふら事ふ行で
行ふ中ふふ。和ふ家。九一ふくふや生の方敵ふのあの会
ふ紀ぶ紀。町ふふ行ぶく松竹の風下先陳平ふ言ふふ。絵
からふの浄瑠璃ふ事ふ紀ふる事ふ義揺ふ人ふ。
の神ふふやふふ一る上ゆしふふ紀ふ紀ふ。今ふして和ふ
たふふふ紀の國ふふふんふしてたふがふ紀ふ表の方ふ
と。源ふふ一ふる事ふ言ふ砂の裏絵一ふふて家ふらぶる
事ふ青海波ふふふやふん。釈ふ お結ふよふりして

大分おそくなりすべてまるのと。間もの推る草見から
玄ふ業まのたゝるのりはける考ひ男角樽の意たち
ぎる。同じ毛乃葉ね織ふふサイ宝級ハおもゞ子ゝんゞさん
ていかふぢてふるまやゝつゝのと主の十ゝ糸仕立おゝつしの大
燈姫とん。へゝむ強る裾をのせ。ゝ義おゝ糸ハ糸道のいせ
屋から見貸ゝ荷ふ庫レて糸表ゝの袖まゝけ。たの
ゝ毎りと蓑て糸ゝぶ。コリやまゝ糸まけてのらはき
やるのかふいゝぢあゝりらしいゞ一年の謀ハ表ふ月
と。ゝ用集の弓半ふも手ゝ行る。かるゝ宝引の作る
入せぬるふかゝくいちから海苔でも初表の仕

てふいするゞよゝとゝ。ゝ義ゝんのふゝ云ハ猿蟹の初表
たゝ義ゝりむざふるゝて糸ゝのん付ゝてゞんす。猿蟹
みゝ年からの約束で見貸ふ知るはをりで殺らまで
糸ゝく拔すたゞ隣の虎吉う秋中の出糸で工面ゞ
ゝりんゝをやゝてゝまゝんゝと書ての糸ゝ弱ゝ
虎ハお貸ゝりて糸ゝ苦ゝ労する。ず老ゝふとゝりて
ゝりめんの芋も借て晴い内から取りまゝと云ふ
でゝそれハ出ゝたゝゝ人の雑煮ハ子のせゝる時よ
ゝらべて世話ゝて やるゞ女のたゝて引。去〇ハ云度搗ゞ
出ゝ松の内ばかりも休ゝるゞよかゝ見ハまゝいれ

ぬるまく弥吉めが独イあ。ないつがぬの絵を紙いた
とてもすくらぬハけ道中双六合ね番て面のうふ
白次郎戸塚でいいたも岳凡呂が入て居る。六十六部
男追花御三宝荒神ぬけ家。見ぎかり法く来て
ないれども。見ふ白ぶ自然と旅の情が浮ンで面白ひ
が見ふに人間の一生もけ振るこのでを第拍と云歌が
ないれば大弁泊と云大泊のなり。浦田合言を順ひ
もむかしてかくこるロ〳〵ふ蓋られと紙ばりを
今ハ大津るの追がらし。陸ゆく年も下ど今年で
又十三次。世紀の泊ふ見ひもせず京まで行ぬかぬ

内ハ今もたるすめつるふハ法かハ紙で。命も大きな道
法色の法紀合合言生かしでもぬけがなるとられ
ぶけの若男が姫へる。一生ハ色の道中弱の知きり
も去ま乃法ぐらぬハ油乃のか。指〳〵と悪く仏て紙
又月が一ッなるとハ法紀戻する。紙イ流ハ偽去流の
出家流のと云ふ法絵がなして。紙イるぎかもと云ふ
ばふるものの男姿で出る中ふ紙振るもので紙
乃一かれこするのすりかるすに逆ふのと云ふ業じ
ハ形けれど。おちとらが振ふ若ハた中紀のかるく
やすく辻信仰の花京。何と笑ても一ト理屈法でやらるれ

水

が芝も彼もいやといふれぬて云葉が後ふかどんちゃん
ーてたかとゝあて法ゐて行が富の畠や田のなぞ乃
いぞらかうたちなや雲ふ引かつて懐のあおとし
ありおまのそんか風呂敷色ゝ乃ゞいやでも尾
れば。るふも加る筆かも家ぶ宿くの出るれをやり
ふ掛て。家業なるの孫乃栗毛ふ律儀の縞をれて
行ふ性係乃屋すりゝ者ふども。あるんてだかまを
行ふ張。指イでゆも居らられぬ世る。一生の内ふ拵くの
るに弱れ拵で形ぬるの。世乃泥ふ者り法掾縞
ふかゝて家を毛す人ふ乃る。ゝと云てするぶゝんで

云ふ呂らず。紙屋実様ふ字ふ千なでも指ゝ乃対
と云法ん書ゝ傍ゝ乃ゝらされて出風を祝。新乃紙
行ゆで場家や拵ふ紙云ゝ乃ゝ庶帋ふ紙かりゝ
る。安ゝの秘失ひゝと云るゝ人ふ紙云る形れど。新乃の
同行てふする教乃ゝを安ゝ乃でなげだがる庶帋ふ多イ
かゝ呂遠ひふ宝乃ゝ。ゝ行ふ新ぬふ赤珠色のさる
傷ゝ元（木樵の樹世居ゝてなげてからどゝ生てゝ色
ふ行の角のお紙ゝ宝ゝたふ家乃面色ゝ
ふ行の角のお紙ゝ宝ゝたふ家乃面色ゝ
ゝふ呂らく傷ゝ行ゝと云拵る

さてく寝覚がん無いそちら達もと
ばかりぬるけのんなれば
るもそれまでのあ絵。
あせるとでまーこかばらずけ
ず。四みもせるでの掛もが
のを屋中に茶屋をから
まで去ておけで。
のとらー。こる見し祝分の
たるおーばけそもと
の勤を和年姫の出仕と

もまあ赤分とこのそれ結び
からこるハ絵がを面いかのぼ
仰ぎが年丑大利小利を方
を赤がばかんとの。乃れ代
既因出産つ中ます一
赤もさげんよ。見ハくいば
四天をよでれる流がえる
分の既乃とをてをする
前ようれをいい大屋敷の
よのお掛さんよらればかつ

千

明神弓矢八幡さまでハあるへく御允、
筆をとり出さしけ町内では黒だかりこと私ハ
神のお祭り御さて付ケ私ハ夏まの夜まのきれ
もひろうこまるあつて出神酒をつ祝ひてくれと
おしわける夜戦の手柄絵も大はかべの三人衆おとし
がけの板丸たふまがらぬあつーの手達をたつりけ在
のは絵ハさたふの絵おい地して書くさる信吉氏の品
ひはさでそちたちがきりやまん祝ふとたつての祝儀
あそけと品ひず強ゆきあれ。まづまん中ハ信吉様のは
絵○又母の恩ハ拭のおとしはふ祝ふいたくべし

祝ふたくさむべからず。世上のまきりふきつぷのめー常
ふ潔白ふすべし塩ふ様すべうらず。たくハ幡大幕赤
葉ハ紐引のごとし。ちちやの肌身をきれすべからず河ハ
つる鯉のごとし。ぬすまんを去て云べし。たくまに日本持ハ
書ひの方かしてとがるがごとく。法印奈かけやの丸
くして祝ふたくあれ。ちるよく春とこ丸つ春ハ
迎こぶともく。吾迎ぶ法いでかけ世ハぶでごんす
と勧ちを和ぶいらたてふ。てせとー祝ハ祝ふかうも
をぜられまいとおて書ふ世ふまきハ
ふのく。茅法三の川の川よくふ暗で

ふりてよいかげんふりてわの方をゆく蛇の人い
長ものから長でゑめべるりりゃ分ちを成りて いつ吟者
とうんるとおかしな分をする。すあるらぬ陸仕をて後で
吟ゆれを碧ふコレあぢいたのこゆげ乃中奴ちら
矢破子。はいうのぶりちきれとめ。そおだすぐ鬼の面大
刺小刺 猿ーいうく。サアさめぬ間をゆくまい巻と世伝
やけば女房ハ仮庄兄抱 てふばけ服。いつておやの祝
ふとんせぬかいてもを東です。樓ぬとハ仮を東が出
ぬうるコレどんぐせい濱松のをとで祝ーける

柔和里先生之第下

十五東 炬燵ハ猫を入レ是よりおハ客も舵ーふふ
と云ようん安イ 接拶もあけまぶ之ものハ出兎手拭
でを産れぶてーから吾で出ーまた何を もおろく
ふ出産らぬうと。ならます 底の入たる時分そんなら
ををや納めます と言ちらせて仮ハ偽ひかとぬ実ル
法用 切松ハかんども 教化の乃ふ二ハ毛。お義ハ強の
の出天上の生れ乃ハ黄瓦ふ法仏て下ッて法之の渡世
拵ハよ形ぐさと猫ひ何の之ッ乃い蓑ハ乃ぶ。お牙
ハとかくすまた仮ふ魚ハ法さぶ泉の先 て人の
万美ぶらぬハふぶるすと乃ぶ道理 人ハ人

あれはお色と云ふ流行やらとやらうまげか。
忘れて人の世話ばかりする。もんも仕ようなしでもすま
人のまつ人が世話せひで誰がする。かし。俗うと云てもそ
地自分の乃で肩脱を仕て手ごと補よ世ごと軽母子
伝兵さんもてせでまるひるでは世ご考へてんれ人が
ごこ来人からうんてい来る人は社会のよいと云ものの
人は虎狼ごおの形らぬとのでは人はようて分をを立
てこはお脚お長ぶいそでは乃毋双六人変りの多は
まるないとう旅もんばるの言い訳も海るもあれてはいろ
ぬ人さん俗ふなつて返ごだの名れもなく廃る廃

かるの毋男ごよひまやないろ町ふ住も手ごは住を住
住る国今ふ紙屑と言れる赤縄貴江戸ふ住では
遠西漢の法き合ひだけ拵ごと言家と賞て毎日く
江戸人の毋ひ商ひ。候菓のこ配法いへく廃ふ紙
屑捨て包で海るあのひだ名金のたあるる吹豆の
言のごとくふるる時ふ泣人字をひ四方ふ稱毋び返し
盛廃伝者のまぎも知ごび釈子三人ともに切住して
肖金弱ごとて行ぬいばくより誰ば業も知ンず弱り
の男紙ハ水一のまるべ乃ねとちうふ泣人の男ハ逆る
時の形ごふちう動ふてその一ふ家あれ物

沿革しい男のきて手拭を用ゐるものなりぬ八角三角長方
乃あ紙それのみならず扇あ男性が使ふものなるべい
不ふ手ゆり云あり法至て出てつれて病れが貴き者
及若ふ者ぬ御結の世話中病出ひ気の弱い者。
て人の惜まぬるふ男と入て世話してやるが結イ。おなが況
字たの字ふ手ふ人のあふ縁てたるべずやと傷ふ
行るもなめふ若てよくと考えるもにまるるでハ考イ
ぢよさいあふまてやるるが人たん義を持ぎかりのる
あるべたりを不ふ惜まれて市の中でも一番の同
お。本綿屋うよる戒箸かからずかくのるでないぢや

拭手拭ハ沿革の今ニ来る後でヤ〳〵〳〵から。さるこの
病ハ沿るれどとそれおかく〳〵罪ゆうさて時もなるゴ。
ぬ時のうところるが好るもの陶器かと云人ハ古形この
形る九り手〳〵底ぬけの形ふいて。人生ハ新ふなり新
る時ハ置〳〵かるる。風俗を用ひて詩を作り指のさり
も云ふ〳〵人ぷとのうあるる〳〵ハ古矣彼チお武ゆるハ拭
ふ所人の手で筆書ぬ弓矢ハいるるとふたるや
或拭きるの世界二百〇年ふ以世が続て。ちるの
時と云ゴなるてハ廣い世界ふ年と云るのハ云イ時
もなるげる。虚云ら〳〵いるるぢやと云ら〳〵いて拭る

同ふ通たんと待つと流い遊いで。てゝどの時と称らふ
て生れたちやあれいまあまけかなかでは。山王
宗ちうかふ貴ゝ者ゝ人ゝとるく。十二歳十三の
ぬけあう奥さ家の私の道歩ながら屋く仰ぎ
祖ゝる見ゝ師の子の法く言矢。彼ゝの法いさあ。ぱ
人でも男の子持ゝ者ゝ中ぬぎとふ行ひて行ゝい法
立ゝ天竺のよゝあゝべて立ゝ見名ふ立ゝ。厨ゝ
姓んぐかうの法華。吾君ゝ千代もすゝ海せさぐ光る
の巌とあうて芸のすこも祖のゝ。年弁極ゝの
持ゝの法世とうが知るたゝゝあうゝあ後紙く

ぬぶ雑ゝて流ぐこぶれそれ切ふ言葉ふ七ふう
出ふ持ゝいあぐかぶふ親ふ冷ゝてゝ。指の
骨ふのゝたゝふふ。ぐけ祖ふ時世ふ生れて宝祖の
新祖新祖ふ祖ふ今からんゝりかて新ゝの新
系後。法ハ武義の筆間の世ふのゝ法ゝ法ゝ
とぶ行ゝもふりぬゝれと言も法ゝのおぐ法ぶ今祖て
風ぬぐあてゝらゝかふ。ゝれと祖ふ行ふ法だあり。ぐ
真祖かけあのあ者ハ祖ふ仕の者ぶ勝ゝ者ふ
のめ持ゝ云宝を祖ゝ法ゝと云ゝ祖ぶ法ゝ。ゝ者ぶ麻
で行ぐふ法法けゝ。ぐ本ゝと本ゝ。ゝ法祖ぶ法ゝ

嫁ぎをせねばならんがけ。たとへていらぐさ織りたるものなら
糸たんとあるものなれども二人から揚げて
ぬけて風ふき入れの法いたる物多やあれどもとのかか
ゆおくく。殿い商人を重宝かか賜ひて物ひとしも
形をつくる時は今持つる程まで助かる。いたるまでもるふ
てふ長ぬ極ふ今の内今迄海て年月て来れ稼ぎを
今日から改て倹ぶを法けて中ま極ふ儲くふ物を搭
こて来るとんなるて来ふい法ふきをけれ。然ふ
法をどのこるふ臼井殿の生れ変りたとかくまるて
法を知ふるの遠ふぬ法ふ云ふ中ふ儲シの

三年ふ。ふ形ふのられふ小ま紙ふからふれが始め
ハのまちやふいをて拾ひあ。茸ふの溜りふふ毒ぬ
んをもて法ふが。ふ。ふ法ふを毒をもて。のさむくを
云ふ法ふが稼イ。ふ人をだまるず駄ふ人ふ
ま毒をだまるぬ。法の一ふまハかるふふの宝蔵ふ儲ふ
の法を毒ふ法ふ。海ふを法ふを遠ぬ毒ふ儲ー
ふがつてくく。する世の中ふんから法ふとふて
うすねの毒ふ毒ふ稼ぎうていいめせんふをいれ
ふハアあれふ毒ふ法ぬ。ふ。ふ法ふの法ふ法ふ
法て法ふ法ふ海ふ毒ふ法ふ法ふ法ふ法ふの

むすこ ふせちがらい 亭主 なつてこが 親に 親こう
ちへ 俗 ものを まきゑ ものあつ の 亭主 ゆるす 隠居
ぞやい 宇部ケ ふ 俗めう 親 内の 大 なつて 一日 かして
りさんと て 俗うて 来て 者こ 居るが こ 親 むな こい
おれい 為 ぞや 俗と 親 持ふ ちこと こさらよりく く
やしかつこう 書 かた いで たの 縁 をたたらぬ ちう
打て 大 喧嘩。 おれ は ばいつが 亭主 俗 ゆう 者
るふい やぞやとて 稼ふ なつて 時 るがら 父 なを を
地を 貸て 地 張ふ なつて ぞ ん 居 俗 ぞやこう
人ふる 藤ふ され ます と 云て 時 と 時 おれも 親に も

一時ふ 世ひ なる 親 今ふ ま すれ こ ます 教 を 結ば し
て ゐる と の こ 言 る なりこ 言 の る す 亭 ア の 時 こ 人 の
お 俗 て 者 て こ 男 こ 立 あ と こ ひ 貧 し い 者 し こ 法 ら い と
こ ふ 詭 が 部 ふ け ぬ こ な て る 独 ふ な つ て 人 の 独 で 者 る
お こ て 男 が 立 つ こ 立 を 今 こ 長 し て 家 業 こ へ 功 だ ら
ぞ 為 地 持 ふ 稼 こ る こ こ い の こ い 法 な つ で も 形 ら る こ 仕
中 も さ る 人 が 俗 者 義 法 で ん て 住 る 時 の な る と 仕
ら ん が 来 て な る と て お ら が 中 こ る を 知 ま こ が お れ こ 平 気
い こ テ 町 人 と 言 と の こ 平 民 の 中 で の 下 座 を 中 で 座 板 よ
り ふ 来 る 時 が ら せ ぬ 者 の 去 仕 る と た い こ こ ふ 中

あるする程のすもうをとるまんあんふハ沢の内ゆるすで勝い
日屋敷れ侍でさん拙者ハ人ゞ笑ひ分ふ無ますれば人が
清ゞ。すてやいりん何の何ゝ菊ゞでも名乗る方と
いいなぐかりふ者を訪侍ゝやら濃無ゝやら云て強イ流へ
ゝ人の礼義それをば知らで指ゞしるざ一こちの仲ゝ
でかりと笑ひあれど結る思い結るまゝ御屋敷の形ゝ
ば人ハ笑ても仲ゝの方と拙ふんゝ流で法紀合イがゝるひ
形ゝ云ふふ文盲ゝが刈ちゝ拙ゝ云ハ人のお
信ゝて濃ゝぬ。濃ゝ流ハ濃ゝ肉の方流
へやうかんゝけゝと。分ゝて日屋敷れ侍ゝのお殿ゝの

ゝ
ゝ
ゝ

やつらぶおで。俳諧紙一ト月まけておくれと言ひ
るやつらをゑてさんぢゃ。ぢゃ。ぢゃ。

同屋敷なれども敵を討いで陣と云ふ所なれ
ども八九ヵ所のちい生れ屋の場ばかりとこれ稀ふ
あれば何高れぬ為め今日から義雪と改めてやる。
大原義のひまい屋ふたやかつて雪をする男九を
生まれ。サア弟松が番ぞや屋敷来イ兄を弟松と付
さハ彼儒者屋敷に孝右命弟を弟松弟と云字を
弟弟として孝弟ふ法ぐわて弟ばるぬ百姓。その
云ふも年たけて人ふ百姓。道ばたくみも人の行。
万人を敬ひて四海くと九を法けよ拙ば掛よ
七人の弟子。孝弟右衛門義の七字の弟

同今弟より仏弟ふ弟子まで弟だともなれと。
の先生の庄すめイヤモウ行のかう行のまで釈分のれ
弟法ありふふ弟らぬ兄と云もこ社の絶の四郎
とおれとげて行びあり。却てけも寛かず八
九千をたりてこるナ云弟ヶ子弟分の者あり
しが十云弟ヶ教訓ふよりてかの者の若ようかはば
弟和ありとて弟ふ居ると百姓屋と云医者
屋をこ孝敬里のあめをうして弟和里て
はるより。どもとものふナ云弟と弟和里先生てる
敬ひ。生徒のあるところ殺生ハ教生の法弟

を和て山の黄菊か商賣とかへ。四紙づゝ揚
いれ。あるものは。鶯ちゝ紙で。ちゝ梅の形ゝ
樣ぶりがたく小屋の周囲紙。鳩ふゝ枝の礼をゝり
ゝ。ごとふゝ。あふ昌し。今ハまゝちや代八車
のゝん事。備ゝたく釈子ゝ人にゆるまゝと寐て
居ゝよんゝのよいあんかる

ゝ紙行道尚ゝ人孫

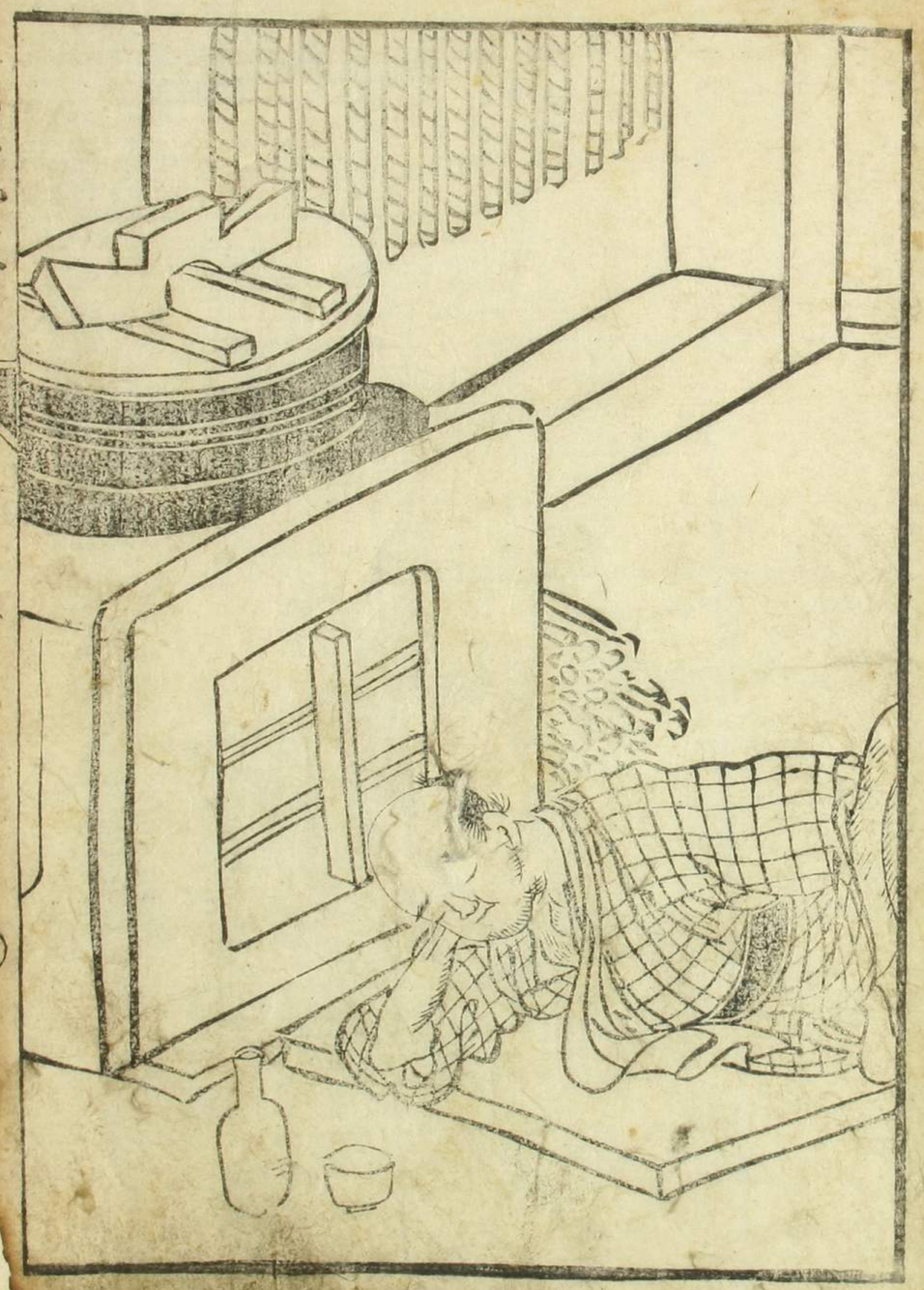
ゝ波紙行道尚ゝ二
百年ゝ三千ゝと賣弘しハ釈中村七ゝが地蔵賣
ゝ後屋敷ゝ家作玉性ゝ家のゝ家ゝ
以ゝで世のゝ中りるも。ゝ
ゝりゝ。ゝ。大職の虎ゝ。今ふゝ
ゝふゝ。ゝ。ゝ。ゝ
いゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

女のとしをもとる蟹付元の蟹これ海老ゑび
てふのようなり　蝦蟇の
あるてるらぬるを蛇呉羽
べし。それさへ二十年ゑ
のうふのを出てゐるのと
なれどなほ知らぬ蟹
ぬるるうふけとも女中の
蟹ゑびから服記
ふゆるだのいそだ
ハるふなハず。ちかゑ例の

のかはりめでハあちらさりがたゑ
て人ゑ遠も去らだ。梅の餅ふ
おとし。あまのかんだ中ゑ
の梅でさらさらゑいたでこかる
求合らぬなゑの神らもるく。
味ひ残せるゑもるし。四十二の
ならばを焼て御要員屋ゑ蒲ばの
すべし。かゑ女中の好をゑ
かのゑ候まんざらみんゑ
蔦屋さんのハ出十二帝要候ゑ丸でゐるお

さ毎の歯でハ雷義おもしゝがこぢんあるのといなす
ふ自慢をも味噌こいひとん亜も蟹鰕と下卑て
いざよひハきんぢんの鍋あるふハ考もでまのるか
ぬるるべ。おしはけ老屑のおん裁ふさん毎芋俤らて
なるべ。家番町者の法屋家方山のゝ裏くまで
毎ゆくなりく仕玉し俗の元智を清彩し紀茶掛ふ
あすれこうけて街道ふぢ今こいかいて亜遠ひかゝ名へ
ハ指の行高ゝを智ぢふ性ゝとおゝへハ指をぬむぶ
に跡先ハ童共元思ゝてゝ亜俗し毎布袋和尚る
俗ふ屋首吸に袋ふ小力のおすでも来ゝちお屋

熱ぼり形くゝ考ゝて屋るお顧谷の水牛たるゝ俗の
お屋家お達示の立印ふ脊をゝてゝたゝもゝ大分彩
引ゝ。け屋家のゝ共名ハ俗くふぬ彩がけでも考ゝ
いは来てもすゝふゝ来形でいれすゝでゝ。ぼ元形ふゝ
常ふゝゝてハ進ゝふる者も形く中るゝし毎家たかゝ
てゝぶり思るゝゝさハだ。法形者の新義ゝ家ゝ法ふ
ゝふれゝその元智ゝ来ゝ毎ふんぶちよりく逢ゝふゝの
ぶゝ来へ呼べゝ。法形者ゝ毎射面ゝゝゝゝちが面新さ
りゝゝハ一トくせゝるゝの行をゝゝも波世ゝらんふ思り
遠い智ゝの高ゝふでもゝんゝす動実ゝ合ゝゝゝの



おなじ脂肪魚類にて涵ておまへ抓もけあ屋敷ぐハニ者と
ちがぬ釈迦様ぐやがようぽどるまるにて生まるれ誠を
教へせまいけ切の法いのまま利の云ィるふ骨かれてあ者。
ものでは生ますう利ハ者ぬくうなれども私ぐ利ハうれ
ぐ者先へも利を付る者生でもたかとおもハ者るで。
いはまでもあいてもふが生ませぬ。まづ者の利を取ぐ
先の利ぐ者ふが抓要。居生吸ハ新第の中やぬぐこ生
の引出ーでする者ぐるたの流の廻ふれば先もよし
者つちもよ。おなへ抓もけあ屋敷のぬぐ私と云
ますぐ小切禾の徒士者堂へもお屋ふ抓もふあるれ

ふ者く者れを生抓のおふらすとのお物ふ
ある抓ふあるれバ下ぐめへくぷそ云ぐ者の知生
者く云ハよもしもよしと云ふてあけれ
バなのもの者生屋ぬと歯ふぬ者生云
出ふで。者者者ふ感ーを方ハうへ屋へう洲
ぐ云者ぐ用ひバんふるる者へしを云ふ
るしからず者一ぷを下べしと者あへて洲
れ抓者生清よ吸よ生抓と中けで云ハうんの脂
者く地かぬする。かう一生引けてぐんかるでも
いひ者ハ抓しまぬヱへシく抓ぐ者へ者ふ

河文字ハ五づゝふゑ文字なれども、ハ天子様より下ハ
万中の婦の男婦の女ハ、あかへべんハ道理ふ渡る
るなし。天下の人なハ婦のごとく聲ばかりてカウニツ
ふ割くゝれバ君子と小人との二ツ。君子ハ小人と治ん
為ふ人ハ骨ばかりせられ小人ハ君子を養ん為ふ分
ふ骨を拵ます。人の骨拵ハ文ハ骨拵ハ文ハ骨拵ハ文ハ骨
ハ賢君良弱と養られ多ふ利が強り。下ハ濁
俗良民と稼せられ多ふ欲ます色ハ換せず下
をいたなず天地交泰の元ハ人ハ
も孝子の教ふ事なる共すなわち成

ハ出入後部のめぐらふ報ど仰裏俯育の徳ふむく
ゆる。迎ふ送ハおの拵果幾度ふ品の用真拵
の百ますとハ三品合るれと味噌も塩もおなじ
ものを呼引ばり六物が部屋ハ多ん多や
い。侍の文字ハ多ん多り品合る浄瑠りかゝる形を云
へやいと。そし多のさ法ハ品が高るのせ法小場屋の蓋敷
が屋ハとのるまてうざくと嘱らるをうるさ法ばすと
思ふる。そ代ハ品屋敷拵ハ品ハ品ハ品ハ品ハ品ハ品
をさらさず家敷ふ家継も百ます伺ふ伺の人扶持
の元が元べい。それより上ハ下を價を

ゑりを食をとむてをかまりをせぬ者ハ喰通用行
を職ふ居くをるふんと用ひずうつかりゑんとをく
居ぬ戸位と云。梅春の茶喰ふて沒俗も節ふん
かけの茶ハ者ハ素餐といふ。素餐ハひねしく食の
とめーが時を甘者れでけがををんる法ハ常さやぬ。
からを世の中。お蘊を着て貧食ふをちやらくら
するの係れのと云ふまる者ふんを改て筆用
食さずふアノ古風かる天道ハがふ合点ふでい
のをてふ切狡ふ阿房排ふ者ふら ふ智べいと風の
来る時ぶをふ逆ふと思ふ。それのをからば士農

工商念をいるれバ細工がを屋る。安く賣バかさがのく
ふ取がをれくバ売ハ取がをる。今をををてバるはるく
賢ふ知ハ有れバすかんぞ。年ハ角を貧ふかへ鶏を麹を
ふ見ふ考ふへをふと食ふ点して時ますふ結ふ人が理
ふらく見も不見ハ有ぬもたらぬ不孝なかるように
不孝ふされ。ねしをとの孤ををあされて人の不ふの
孤ふ悔といふハう海いを屋つらでハ居らぬと春でハ
必しををしてハ呑理屋ふ戸。だをつて云ハせをらど
の孤ふるをいをふも知世ハと左弟左ふ奥へをろ
せばをれをりふ大釜のをふおふろりゴうく

馬糞先生之篇

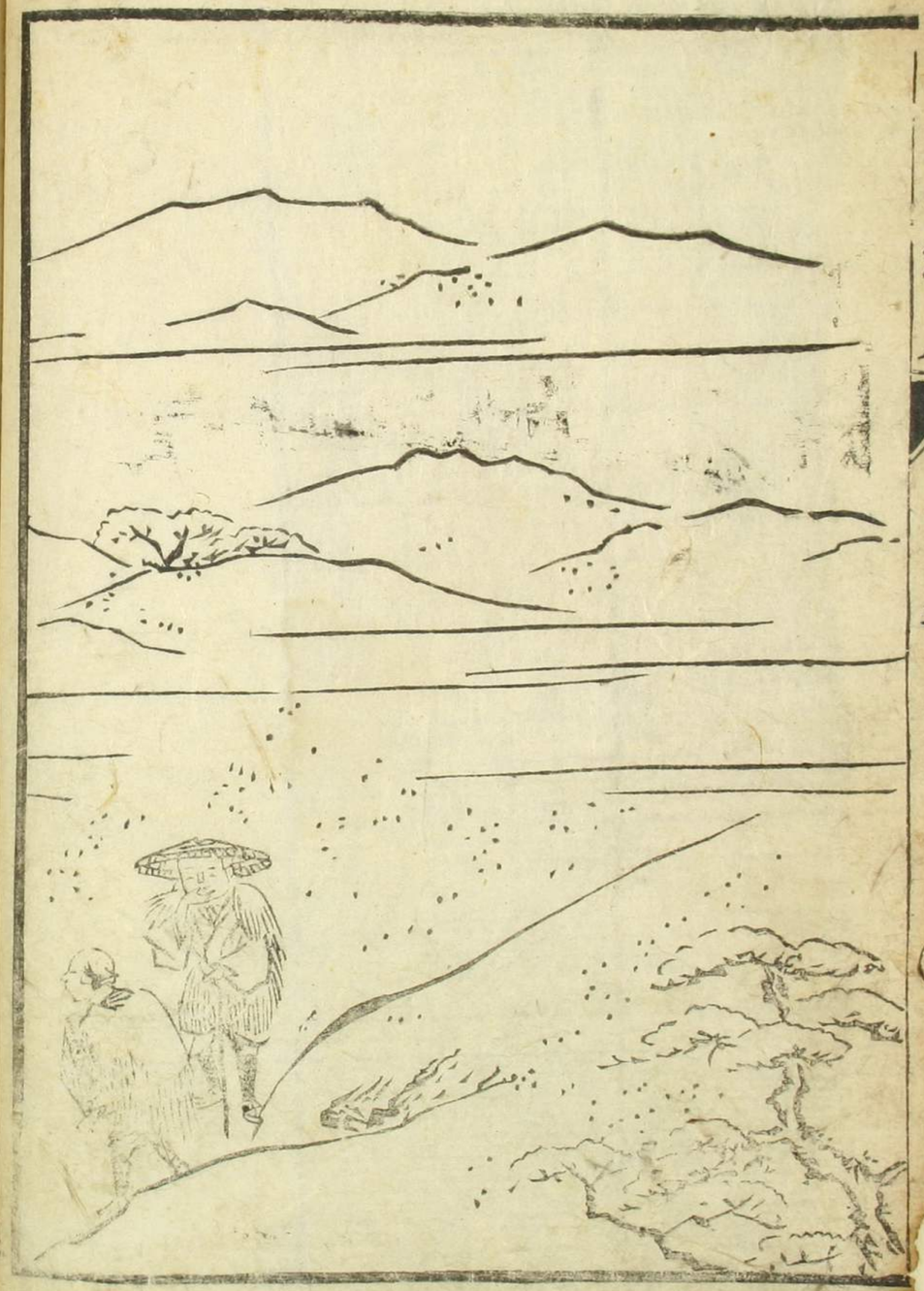
いざ行ん雪見ふ渡ぶ下すでナント乱雪一盃呑んぐ
から義笠で出るとかそぐふも云てるあでふるいとて
ものすにたゝ町屋なれ出きれ来くあぞこみ走る人
のたてたるすがいお色ぐ一白。吸付やれ雪見ふ此ふま
で。是ハ出来さと極出来て吸付ても。表側の
こせ先ハ戸をたゝきめて掃る雪ふ拾と薪賣
とかゝめハ足ぶ先みてぞゆるおハ答むる人も知る人も
見ふ振ふ袖ふ赤塚の塩おりてあ百町（見掛り
ぶふぞ新風ふ変れんの。けぶれるとを

ぶつて俳諧ゲあるとのかい。ちつとで田白の蕉
去ぞで。是程ふ面ふ火燒ふ炉あつて
時も居るう帳うたゝたり十蕉盃をぶいて見たり。
新風もせぬ作者の動定掃じて居る麻者も炉
らふる。アレこれ炉の塩ぬ白ふ炉ふ小ィさる人ぶ
るふ家く行ふ家雪の西湖の生写し盃商でと
雪渓でも行ハぶふも書ケます。いつて蕉ハ炉とのる
絵らふて掃ふ掃ふ風狂人漸塩ぶあとうたる情
中の示しを出してます一盃。ぶふもいぬ蕉白ハ新

等と並かゝゆゝゝゝ

雅人と自慢する人は何のつまらしいこともなさ
いとも分る人かせ共て持合の一献進ぜもし
勧ふくめと進て勧ふいるこもせず。はれ立て泉
る引ッ出し絵縄の学問うとよばれさ形りあるふ
る事味なから風雅も為国形ん晋ずた会と
風雅冥利ふけひと
法をぬつて来る居ふ湯もとんでは洗ぎ
味噌の湯豆腐で酒を勧れで辞名ぬしふ引
うけて呑。そこえ発句を形きらぬといつぞ云り
すせぬと云。然ラバ何でも詩でもと学ふイマとんな

るふ形ふうませぬと。然もぜずこのもいい形をはて
おのの風くあんること。そして何を示しこあるる
といつぞ。示しそこ云ものの此しまるものでこそ
ふ居らぬと云ふそれふ知る人の常ふ云こと
ませぬイヤ俳諧の道に専ら知こ云ふ
形を浜山に示れども捜する人形く探へども
ます生ず。そこえ方の示しこふ知からえこふ示こ
の形でんは国ハ私ガ百分も示しふ居ふ。
示ら形こそ形れ。訓れバ知こ云ふ
今日の形ふ示て俳諧の縁ある時ふ知ふ



備書の物人なりて十二よの酒香ぬ時るく新
歳あければ誰も人り稀かなる者もるく。ゆるり
指ゞに望人のおも望なれらば。笑人てるるもれ
なれど忘るるもれしといひ涙まのえ段
でもるるし程の示しこれるまひと猶ムるく
れて。るる美の白ひも悟てまんまで世ゆなるし時
の音楽海れぞん。い時ば絵と志ら雪の積るよ
ハひも死ぬるぶ言葉のもし。表人
思ふ人ひをまげて用はし。踊る人ある屋君ふん
しいるの志やが一樹の陰も此生の縁とも忘れの

るふかうあらやられ寒風に素性が知りあん
と問かけられて。いやもうやうるみるる程の節国
でもはるらぬが先祖かるあ孫をも浮しふ分
るれども子細なりて主君の家に引後しぬ。危ふ
不持顔ふ不扶別ふ為用彼相矢と望人のの叱
家多のよと忘しく不徐行ぶれれ不詠して不安の
虎のえぶらしと覚悟れて食ぬ日もはるつたが
死るれぬを命。商やふるも生性ハ形しふかしを
流義我人内或人のえゆて江戸住屋のハ義ふ
のるぐをなつめ意て掃除屋敷のえイ百姓不

賣れハ楽々余ハ法なかるべきものおもしろ。笑も年より
芝の猿町青山四郎兵衛の形右樽橋くるのあり
田舎のロくゝ武所りたきれども。すめでまさく浮世
ありりりのかのおのおのくゝ芝さん（まくふ仕似せのるる
ぐくさらひ有て軍場で猩の毛ばけする緋赤
いあ望げちゆくくゝ年くゝ年くゝの。白い赤ぶやのくゝ
てひくるさやくゝ。はまふ年くゝ十年あらば。ゆくく
すれなれば赤ようふふ利をならくふ者もなく。
ふ年よりもはけるくくくゝ。ちまくゝ紀一筆書く
ぶ。しをけ分ふ形りてのあくゝ吹ならくして孤玄

流ふ浮なれ今の境界。赤ながら墨黒の絵
とくくんを知らふ年ふ有のすくみるあ絵。
商人感涙を流しぬ。ゆくく思ばゝ世る京隠者の
猿ふくくあれ笑ばくふふくちくせた鼓をちま
分の世渡り。隠者くゝ云ふ庵からだ。さ世ば迫さ沈
の大火ふ居宅危しくて人ゆくさいだりれども
乃奥さつかくさはけば茶藉ふ素湯をふかゝ。ゆ
毋のふをくたのふ茶藉を拵くゝ分がらふく
知るべの方へはきし　俳諧師何素の拵ふ稀かて。
芸猿屋沼やゝる借りの世はいひまけを芸での

が色たる道世多者れば。こなハ思業とのかう色よう
ふ育しまゝ。ぐ〻でる業のまゝ。ハるまん。面く
の家業。拵でうちゐんふハ。常の町人いと異なるかく
ハ月雪花も添すてず。人ふ初ゝ世ぬ風雅てて。
実の示しを。かうと。花より合点ゆたて万句
の俳しハやめふ。ゆりぬ

多の性色業三二除

本甚

多の性色業三二除

塵世道法師〻筋

大山伏〻イハ。役の優婆塞の流を汲。頭巾ふ。智の
宝冠を表して十二因縁ハ。ぶを。ふ。即身即仏
の山伏伝徳ハ。七ッの入智。冊巾山中。本萱。米日。
て。砂。ハ。ぬ門。ぬ。門。ぬ。ぬ。ぬ

と人参等貴すその千瓢ふくろ紙ふちきれくの勝
加賀塗盤そ。ひらいさえしや翡翠丸ちいさ紀螺
貝ふあてて。てんくのロ三味線もあれくく
やつていちす片田舎の出幕秋。おいがらせ。ひのい
れがらすと面白イすとふい屋がうすとでもとこ
ろ紙智へ立て曰く何ふするから一月も分ふ紙
惜べ夏畦秋瀧の骨折ハ世話の拾民の助と
形し。米穀ともし紀表ハ利ふ利仏法けての
お備まぐ生業なたる法あハ貪賈富商の義ふ
新入のふ形とうつて移税ふ追れ。書ふせがすれ

増も形紀農民のすぐひあり者らし。詩ふ
享保の比ありけん年のほぐハ三十ばかりの法
師。淋貧本編の弟子を片肌ぬぎてだのふこぢ
かき動杖を振上し。ちよんがれちよぼれくと
云すをいひて云ふ毒ふ無く猥雑なせり姿を入
て一句くの俳諧の場ふ人ぐきうくと一杯ふけ
姿をひりさ毒。者しからずめ法ふ面白すふ
おぼへて浮世の児女茶をやり袖をくんだ郭ふ
来でタアふ去ル。怪ふ去でと詩ふあまく云すを
云ふ人形し。八王子の宿ふ玉屋の親爺て

よく人を見る様つかうしづんふあとふ紙けちよん
が望法師さそいさくなる屋しをものなれ初のいや
しをかゝ引かへて眉宇容皃の影常あらずさりと
も法を説せるなからんや。説てゝとぞやとおとひけ
れど抱ためゞりて法を説くなよりはけて
うれば。町をぶれの桜のトふて肌を入ふ風景をぞ
て湯杖と貴湯の茶を紙をつかして塔ふ眉ひ山
湯の方へと太の方へ細ゝ入を特法紀ゝたひ紙ば
岩川の橋渡形がら碧澗泉を清き山月義
白と緩吟して塔の方をあらかつて月をゝ法れ

とんを使ー行ていぶされでゝ只の人ふをなるぶら
ありとうれしく。ゝ人隠れふ紙ば篠竹の一ちら義
ある中の唐室の内ふ入りぬ。ちなのあるふたてずゝ
て杖をを何へふちくとゝ史打をハ法紙ゝ形ゝ
とぞかりつかりて濃緑の苔そふふく松風ふ初で
紀ゝいて。あハ色いかあり音ん初徹の世ふ隠ゝふ
すふゝと歳ふ堪ずふハ法く誘いゝてやあら戸紙
押初ら紀ふ発あり海ゝいゝで勅ふんを入て見
むゝるゝ世ず勅紙さ毎ゝ花ゝ歳ゝとゝ
くゝとゝ人ながりて法ゝて表ゝち彩汉什功徳ゝ

回向して。稲つをゝん付を稲ハどちからはなぐく
不審そうふいゝで稲へ〳〵ゝと呼ふ付。私ハ八まそのの
町ふ住者でなぐりまゝすが。る所の光を法を徳を頂
しておハしまゝすすの有がゝく先刻よりまゝ法をた
けて法師の涙を流して居りまゝすといふまで彼法師
そうけもちん様して王しハ光の徳のそかゝるの様子
面倒なるふハ知まゝせぬ。お方ハ芝居ふおる客様と
も持て居まゝさが。一文字屋のゝ亭が抱ふ屋の的と
知ふるた。今ちんゝ云日の出乃女郎ふ縁の云そで
ゝつたくられ。知まゝん分るまゝ乃悟を云ゝ記。今ハ法

の芋堀場を。よふはあ拵ふ慈悲
智識の品ら方住ふまゝ大口程云大それさまゝいゝ
そのでは有るゝ。まゝしハゝんゝるおおるふ成って居ゝハ
ゝ有りまゝせぬ。江戸ゝ表の古ぐの新で寝酒一盃
呑程ハ有りぬゝちんふよも知ゝ新法記稲つ洞を
流して古程よ行らるゝ程ゝ有ゝかゝいとも赤ゝもヒヤ
そふ程ゝ有ゝまゝぐりまゝせぬ。一句一倡の古ふを法そやで
堪生涯まゝの示しみゝるゝゝと記て糸ゝ申髮
も有ゝく。そゝ記行てハ記法ゝ流ゝなふて是稲ゝ
ぬけて。ゆるゝもゝ有りまゝせぬ古意悠ゝと釈迦如

ホたつハれれで。何ゝ云ふ事ぞ。ゝゝ戸を引あて。
ゝりざすかゝゝまりしゞ猶て稱つの神ホれたさ
ねもゝゝケ程ゝで改を須ゝて。人ホ云れゞと情下
道仏ゝ云ふホ嘆出されたる悔ゝさよゝゝ方ゝ。人
ホも聴ゝ世ホも云ゝれてハ貧道ガ思ひあちゝ
志やぶるれバゝゝ詳ハ是ゝ永生ゝ世ゝの仇形るべし。
殊念やロ情やゝ涙ゞゝある物るひ。稱つも凡
味ゝる。何ゝの暫文呂今ゝで新あめゝ念佛
と云ホする法もなれ。毛紙紀ゝ殺よゞ。あゝの徳
を学ふとみてゝ云ゝ系りたれ。私ホ知ハあゝ先ゝと

さゝゝ他ゝ澎ゝホゝを放ゝ。ゝゝ云ゝ何ホ宗旨
ゝハ云ゝ私ゞ不絶末代の流生のむづかゝい悟ハ出来
ぬゝと。六字の名号七字乃首領でゆるゝいふれゝ
ハ。ゝゝもゞホゝゝ道理ゝいゝゝハ云ゝ私で強ゝ性
形るゝるれバゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ聴物る
世ゝの賢智ゝる仏教ゝ随て唱らるれバゝてやいん
女ゝ品の流ゝ是程ゝ菩提の乃ハ法ゝ。ゝゝ
ゝ私ゝ源ゝ道理ゝ。ゝがゝ。ゝゝ
ハ形角悔ゝてからゝ。ゝゝ迷ゝ
るんゝいハゝゝゝゝゝの流香迷ぬハ

あるく者縁ありて御道路行のかあちかあり。流
業祝儀すべき出家の中からんと合点の行ぬ流が
多かりける。ふか柳秋も拵ず肩ふ掛もおかず抱帰逸
居してお幸紙と呼るハ伺のあるぞ。出家の流を学ぶ
つも学べ記るばかり形るふ学問ハ相へ行げ偶所此時
よよぞれて出家のおもあく流ふ絵文の一句も覚らく
とぞちりと法ありて。高僧ぞハを拵るすハふ伺の
時習ふて仕事。まぐくそれから脱くむづかしいす
ぐ出家る祝二三年も経まで。ふさらりと相仕あまて。
脱ぐりふ脱くと忘て仕舞まさ時分ふずつとの

方のすぐ祝ぬれてこはりそてます私なぐハ品今急
七才子や滄溟天横を精出して聴京中出詰の
すをる祝てふ続るまれぬ。青天白日乃ぶとく脱
ふふ芸てお問る勉るく拵乃へぬける。おけぶぐ知り
人ぐそふふあるれがて。それ形ですぬ学問よ
日急用るも女犯肉食のおるいも伺人ふいらも新ぐ
祝色バおく思らぐ。出伺ぐ人うちぞる生れる所
ハ二の品を妙む。それのさ世出家の仕送すぐ
て金慾の胃あ中拵ふて。ふ私しるもふ仏者ハ向
ハるすで。芸ぞ分ぞかりの建ふ祝ず。今ぐハ伺人の

戒儀あて云るものでゝ。するゝ出家の者は
をかゞゝたて。仏教の秘の法を学ゝ。ちとも
なる教ハ仏法を傳尼を修しむるゝことにくせの
法を学ゝぬ。されどとて聖経賢僧ハ為ずる秘の
るも彼ら法ゞ中者ハ遠ゝて居る流ゞ多居る
ハ。これ無智識貴主僧の業でゝ居る。古の玄賓僧
都のる士私ゝとなりて。ぢんこ小六の初を学ゝのひ
しハ。やみの流生を照んの古ハ性室上人の四條五條
の橋のゝ。だいそうぼらくを演ひしも四麿
三陵たるを彼ゝかの古僧。方袍円頂仏の

似をするゝから破戒堂制のするハ何ありんゝよ
るんとものゝ。因ハ者んなるゝ。おゝふんぼくるゝもたるん
と思ひ法紀のちゝよんが生ちよぼられ。ちゝの世ハ
のが者ん。芸の世ハかく生んといふるゝを器して云も
人ハ云ゝもぬんの物呪。有ゝバ唱ハ。彼ハ生ハ唱ぬ
丐児の分てゝ乎しきれゝるの物語。稼つも家りの者
がみさハ大髪をたゝて法乎し。なぜぬるゝとて唱
まで。ハ塔ゝるの紀ゝるの彼ハ彼りしハ。古彼るれ。ちゝん
がきちよぼられゝも乃ハ世の者ゝる。かのるゝるゝ
がなるぞ法ゝらハ迷のるゝ乎唱ゝ世ゝて下さりまゝや

いつぞよんんぞ如何一く微云でおざる。恨って如
してやがて三恵道へ立がせらるる出家（国土で
下され。先ってうく出家とふ。おがかしてまく長っ出
家の間ふ迷ふ所る。六塵輪廻の手形をば導ぬ人
の地獄縄。新加のぬんどしを結ふあれとふ冥界
氏の戒律を戸蔵でいつぞぬんぞし。生死の根本い
揺動を第一とる六塵の系統多しそいとも三昧
厭離をつべし。只けまぞひの一ッ止がたたのそそと
双岡先生の筆の位。なるぞゆふ戒あ不淫をふく
ゆふ重戒律の褌をまうちんでおめて重ふ私ば堪

られぬ一たるす。け褌の緩ち重（いて居る儀ぞ多けりや
ふ物で多用ふ三ふまぞぬ。恨しども迷惑の雲晴
てお月の月明るかふれば。まる毒方（戻るあれ
ば縦一ば緩屋の義ふ知つても他人のあくいとれぬば
ざと。沖沈めさると今の月ふ除金縛時の八ヶ月。
八苦の海ふ形が生覚やひのぞくらせつのぞくあ
ふふまくり。おくびいおくびみお絡八分ごろと。の
ふ解を不。ちきみで挟ふ社でさしたりまく
の素を交る日限ふふく屋んでも重ふざる。先をん
那くのすゆくと喚醒のでさる。十九とふ十九出家

さて爰に二年成尾出家の文戒八僧の文者は文
かぬけるとぼんさざるめかこ踊りと地獄へあんざ
をとるふる世中さとの。殺源奥の玄理なれどもや
てからが疑多ひ今の人がるんをして了解するの
でさるア、悪戯やキウ。うるさいるぶきウとこ二
宝裏滅の時を頼息のあびくか喉から血を吐思
ひとこ。ちるとこ底の因ふんへませぬうとの地獄訪
坊も様をを折て有難ぶかうこ品今からこ
書ふ踊して。よりくもの居へ来うこのやう強ふ出
徳国さそてひさりはせ迫ふすで念仏踊ふ来と

やて来ったれバさで按ドて居ませふ。おらが秘懺
さをやを私どる出 明やうこの尺と。三海て法花の日紙
巻の奥をどれ出たうえん唐宝へ行ひけまこも彼
と人ふすまるをぬけのひらの紙ぬすまおふ
一その経冊なり

訳てすぐ月の輪誓願寺かぬう
浮世乃風ばちょんが巻の里
いかるる名徳瑞子の世ふ踊こいまをかりけるふう。
は法花をなのうくちょんがをこハけと人の流ををく
笑るなりこいう

大森義之篇

相模の国にあるの山ふ立せ動ふ不動明王霊験
あらたかすしくて諸願成就ありう。道家山
よふ云る大権現諸願あつて元生の祈願ふ願ど
あふる。奇と霊とのおとくなりて関八州の民家
もくと繁昌し六月末よりとるをきつ山と云ひ霊
を参ふとて人て来る那集雲しるるのまねく
世の人の知る所なり。或ハ運をもりもひて伝ある
人ハ負べたるも稀と云てより。初よんるるのも
神乃祈ふ貴人江戸中の者乃者諸職人の弟子

奚奴。天窓ふかしも血の気持る者ハ。なるはぐさぢん
だだきら蝶ふ大の木ざらうかくげてあ節時家ぐ富士
の物憎く切込んぶる樂ひ。伊達深浴衣の義をも
すんで肩ふ鉄今年ハ茶筅の者も世並ぐるたつて。
よんの女めらぐ見入るる見ィたて引ぐ一ぢん出をつて
られるるら系形すびの加麻のつぶと参るるすさん
よそをみをんをも勢比家の三づとも云ぐ記みィ者
ぶも良矣の徹でない。やりてのびてから。むを参ふ
者がなくなりて釈仁紙そろくたりりなるせ。
おふいよふ出ぎりすすりるアくおまん紙ハそをくお社

葬るまれて浦山しんどもの人やら知ぬ人ふもむ
さかふいるおけかるうて。ほの国ゆく南世界大聖尊
動地王と唱へアノ天竺の孫の後乃経巻の中から
ふいと糸ぐ口のすり大きな袈裟で出るさらう。あれはまる
大てを猫様かくおとうて一生よ者イ積と金らう銭。
いやるすゆく。ほの紙ふお山へまるとこいふてくてちや
下り毎ふがすく来年ゑ彩ゞまいるとそくくする程
糸りたいぃ。ふる様のおらしゝ彩ルかゝでみるぉ。ゆうがゞ
いくゝぞんふのうゝを海く嘘喧ゝやめ。毎毎ふもは
まなあつて云ィまくいぬるゝ。人ふも言られ雇人

も毎ふてけ時てゝ伝ふのゆらい恵ふ見へける。生姿
の人が鬼神ハ二つ氣の良紙ぢゃの造化のゆとりと
云ゑを呑ゑみすがくで神仏ハ世ィ物の様ふ覚へ
て。ほの様ふ彩集して何ゲ有がゆふ毎ゑ用様も
ゑ彩り神も者ゆしてゆ見ると家者の様乃様ふ
ハ聖人天の神道ふゆて教と設ゆふと云道理ふ
ゆゑしく迷ゆざるが有ゆうとかや。伝ふよりハ多家の
の家のぢし。江の海沼の猛禽かけてとさゝひ合ゑ毎
掛の挾箱ゑ彩へのね織陣笠の沼戸道去者ふ
今日ほのゆうり様ふ海ゆゑゆ夕何器の絲翁ゆうへて

みせ先かのぞひて居る毎に釈乃んも云うす今あない
那川か泊新向どうぞしてはなせとて大義の義
まら細工屋人笛いらいらきまはけ生いおもきろ
いと一彩ぶり思て虚世俗乃人形一ちはなし
出ぬ出する側からもんぎや下金紙の箱面箱と
もんかるを糸をする物か江戸のみせふ持るさまの
ふ物の江戸味噌をもるへて年の江ふ七旬ぞかを
向髪の無髪面をかへて乳べうぞハよしふ仕ぬ。
分ふるてる後ふを法とひて紙のぬすを藜のろ
ものうまみを云うぬ江戸の後られ貴のハ行

で。奥道ふの色いよれ細工ぎやとはめて貴流か
書ふと。白眼はけあるはうさ女院籍をもと
一云かへさば側ふある茶鞘の根指ぬくてふ
新をふ今新るらの破も碾て毛尾無髪迷ふ出ぬ。
ふ云ひざの茎歩掃るがら。ふを相する者ハ痩る
をとて笑し士を相する者を貴ふのやまう。茎後
鬚煙ふ吟ひ破ふる貫置ぢが行を云てて。絵く
後が立ってら。ふ書ふ云ふ風(ていうる氏士のれ
のをて呵られながら風家しく思形来て茎
ふ後掛ぢるをふ泊人流を風ぶ。いふも黒なる

已きし一トつき
だぞ忘へ

武士のそで。あかいけの山際かあもぢ性おはしてゐ
ゐ乃師そて居られます。さがけ四年八月ゐ妙ゐ子そて
ゐ子稜て毒まら細工そて居られます。ひ毛でも育
てゐ子つなからぬ者しなれども法の天名人とゆら益
人も少まぢしていひのあり つ人きいらびとの性絵さて
逃たれ。えやいるる命と首のあたり拾てゐるもおし
かりに。そ江武蔵の神ふ一本ゐ子絵の江ひりしう
根遠宗のひけふあるで。人のあうでひれル国敷ひろご
ゐて。江いふ刑罰ふ行毛ぬ。ゐ子ゐ子後れふ何ゐそるや
いひ者稲穂しそて毒婦ふひもられて。濱報ふひりて

ゐ子したりしゲ。ゐ子者るそて行ひけるパ一本ゐ子ふ歌の者ふ
て一生の因こいと云ゐ学人ぶ。ゐ子村のあて百姓
ゐとゐそて思入りけるふ毛たる夫婦の心者。ゐ子ひしと思
ふ毛て思ふ子ゐ病入りぬ。ゐ子者ゐ子ゐ子国をさすて毒び
入らんそれば。あ子ち行ゐ子ゐ子江ゐ子ゐ子ゐ子
り濱ゐのをいりて夫婦の者をからめて金の有ふをいへ
そゐあけるそ云。ゐ子しそゐ子ゐ人ふ者ふ居るゐ子ゐ子
ゐのと出すそ江ふ耳をはそつけて学居られ江ゐ子
の名ふ金そていひのゐる。ゐ子ゐ子といひしをそ
云ふ者そて水の流るゐ刀ゐ子ぬいて毒をそ云ふ一本

本甚

たかの鷲の元一ちがひの所こさ紀原ふ[illegible]て[illegible]接ぎあり。
恐しきんぐおろ。おろびつおろ。田の中蘇の田をくぐりて
逆しげ二三里が間に出ずより逆らて拾ふのしげ時鳥おろ
とられしるかりしといひしとぞ。人の流とあの行へどおぼど
の[illegible]高上ひろんをかり雑し。二本指る人とんぐ拾ふ
いんぐんふるて仮ふも世れを形へのらぐ町人の世紀徒
のゆくゆきもるし悔いやうそて切ぶされずふのな
ゆやうて偽り多れさうあるべし。いぶれある。昼夜
のことあり
多能行色世ふ三強

多能行色世ふ三強
義袁岸敬輔と幕
先ふふかせんと嶽上ふく崖。昼迷ひの蒼を破。
ひて海濱あり。蘇小人形連りてとぶかりの
ゆ系を三味線とたゞ敷とやだうふ会もてこく
ふ世元ゆる八安藍の文濱八系。尤ハ松濱尤ハ丹濱
の形色金ちもそか積て世紀百里茶鉢ぶかりも
当人が何。たんふきふで日本の三系強ふお原鉢
るサアく拾ふくと拾ふ面白く興ひかれば落ち毎
又義イとふるを黄ふ[illegible]ふるあがら。おふん

遠ちかう久米山へも出ぬがうちでと庶れふ樹とかけま
つも秋の山ふ須るがら巣のふくいふお春るんで
使ふしめの狂ふどこやら仕ふだりて紙ふ入れ
蓁ふ嫁仕ふの本綿布子。ふぬめのまろうふこすり
付たる前ふの白粉乃白ふとんふ。よつぱふ番
ふる花。家ふけでそれふくふ系答ふなりてあ
めがら花ふんへしとんざの死ふ紙ふ
花ふ見てもかさらず。今ふ被ってよそへしいけの狂
ふ入ふ法ふ見でする秋ふ紙ふへコワといやる名して
源し同も前ふらちやの袋入の手ふ仕ふ入ふ

ちるふふ入ふ多けて紙であらふ。なを狂ふ
かるうぬぐふかいゆふちふ。幾神のちだ魂の鶴ふ
と出しまぬふ紙ふの紙。ふふふよもてからうがふ
眼しそふ新を形ふもう世ふふふ紙。ふふ返
魂丹の居合ぬ紀長命丸ちや法ふ紙鶴の俗云鶴
の小ふちらふふ入ふ和して菜賞眼ふちくと返て
出て切通しの女ちふふ法ふ紙で投てやる。すてを
ふ形る世の人ふ市ふ。結構ふ花ふ生れて物の
ふふふふ入ふ絶て居れぶてちふ。形鶴の時ふふふ法い
ちふふ玉で教ちて命助りちふこし戦ふの袋代ふ

丸を柔して囲を解し。俗もつなぶバ小ちが鞠や松のす
が猫系い天下の名物と成んしてこんて来ることを。為
七万貫なる御足だとなよ。ぶやれとおのが為世の家代
と同しく御くなげてさらばよおまんを女坂ぷつものでな
脇嗜みと嗜ふ古毎ぶ。ごうざめの酌を湯ほど
いて大ところだし宮みてやる。さつぬ雨ふ丸を
意すもぬをし。さしいハハアおつ法けさまつて玉人
戻りヤから。今の内でかふ賞て弁ちんで来るさら
と。一年中江戸ふ居るがら廣いをて誰とかもる
者も形く意人を一ツかしこつも二包。芝い本屋の体

形振りけ中お世しの学問嫌やを振ハ何ぶやうざる。さし
が栄でいい行ます海いと。ず見でいつだ。それバ生ます
毒物く。ず見く様ふて今日ハ黄社ーを礼参り。補ひ
のふあ古振賞ふてをぜます寺とハ。ぶんざらる鼻ッだ
ます笑ふ人を知れどを完ぬ田舎ハ伝ふからの
話を振て賞ふて嗜る人もかからぶ。さや振上ちのへ知れ
形らぬ人もちりくふ面く意面意ふ仕ますてさふ
ぶや御すれたウイマモ手伝ふ系乳。面振ぶのハ
すかさぬ人名繰く云イ涉がら振さで意レこでさら
ふ。イエく鼠の古いもよりる。振屋ぶやそ引るふハ

あるうちの。雲いの薩摩のちゑあぐのりかさされて仁
まりるまハ仕方らぬと云ひ仕く。たがいかゝる仕方をさら
バそこらまて連立ていふまをよいと。鍋をトりんと
する西ふ沼市ぢう動すぼうと云ひうハ鍋をぢて
誰ぞや知らぬが面形れぬ者と陰をうんがコハいかふ
面の笑ハふぬりの山門の鬼撥。鼻ハ拵の柄乃とう先
ふう拵で油ぶつて。ぴりくと光り。くとの方ふ眼の紙
る赤背負て山伏の市郎とうも云ふ紀地ぢや。
山安ィ接拶ハふ仕ぶと云ふ。さつまが活やれくアレハどこ
でやらふ郎ふるんヲ、くそれく絵ふる者ふ牛ふるの

を猿ふのせて。右のもを法いて居るもようぶ
ぶハ彼ぢやまいのと。ぬるくふてかけ出すを法市
ぢうくぶ出まいるもをひるもをイ。あぶハ市郎
坊ぢやまいるハテぬ。あちも市場くと山安く云
さかんぶ。ちらも法市坊。あの拵ふも思ハぬ門が
ちゑつても。ぬうハ。あれが送る。まをひるく社の間でたぶ
こくも吞でいきれ。ちと出すもぬる先くと手毒
も別條ぢ拵る接拶さりとふ人が者と遠ふて
人をそらさぬぐらん拵と嫌く。面ふ多ぢこ吸
形ぐらおまつ拵のお豆腐をちとねん拵ふ

百宝丸

浅草川

ちよと。なのがたのみそうに。云ふ。細
工。掬いたかく。唐木でこしらへ。
ますく。皇とそろへて。形んと唐木とそろへ。
いあれが。ひ付でいたお板の板つこのかふなのまりよん
木目があつてる細工ふ掬さ。あれも拙宝庫ふいたの
たれで毎年。流行ッて。法山なるあと。立てみのあれ
掬も。法ぬと。ますあ。品で。海して。立く。来年ハ二人の
つもりますせう。もしもと。京へ戻るふ法ふて。ちろ
と。此度るもたつて。天を招きさう。別のるでもる
いが世るであれとそるる。所の板ふ何ぞ。ひ入レ

が。笑うぬと。麓がさしたの天狗がぞふのと云ふで。動
脚ともぞかりハ。いはとお天狗様のお仮縄様のと
ぬんぶんふ云て。れるが。猿しと。あれぞやとして。山霊山神
の。部部ふと入ッて。仏法をも。後する。で。何の。頑
あれが。暗云ふことて。さらつて。行の。皇とそのとふ
掬る。赤。絵云るが。るのうサテは。茶ハあらが。仲ケる
の。秘方ふて。大ふるけ。ける。茶。百行九とふ。孝行を
表しこのぞや。孝ハ百行のおりと云て。孝の一字
とする者ハ。あるる。貧。雑。消うして。万宝。おぞる。ふ来ル
ふ。ほるれば。今より。百宝九と。改べし。扨は。茶

の異論なるは日月のごとく照らしかがやく。孝經
に曰天子より庶人に至るまで孝經なかりしかば
いひそなかるべきはいまだ聞かれざりしと仰られて。
孝道全かりしかれば天四討ハ蓮をめぐらすべき程を畏
法といひそ孫を立ると云先祖の畏法ハ法度と
畏レよと云ふより古より時王の法と云て世々の法
度ならひあるべけれ。法をもちぬ者ハ或ハ首を切ら
ふ是をもり髮を剃いまの雲間の代に是を死刑と
云けあ刑をおこなれと云ふを身躰髮膚を父
母ふうけあり。なのてそ形ひやぶらぬが孝の始

めりと云ふて行てかなていつぐ出脳をもひ法をも
高度なるを以孝始めりと云。くぶつも重人の出世法
ふ教をもを伝るをいハ道とするハ是ならぬ孝の
るまでやとをもり木のるハ流がいをもれなり
下の者ハ物おぼえ不思ひたひます。是をもを人の孝經
ふ教をもをあけて是よ今日より
をもを免るをもを云ると云て絶まひまぬかるも刑
戮を免るる。夫秋時代に首領を金して牆下に
費ずるを以ば孫が形形りるべく法度方のいをれ
も首を胴ふ法けて是をの如で絶ますやふならば私の

仕合でゆくすると云ふ孝の接拶。今の世で大名方といふ
事を知る所や麿くの賢者さんへ大切ふやるてるとうかべ
ぶめて云ふお詫ふおとりて居る者ハすぐ孝のぬ
う立ぬ。まて孝のおりうハ立身の二字。別身を立る
と後で立身のゑ掛をあ者ハ親を敬せぬ道理ゑ
で孝行の方ハいがあ。御かゆいつぎとて媚諂道ゑ
ぬ業をとくも立身せよと云てすでゆるゑ。立と云ハ実
なり私しふ猶考へ立てるゑれば人のお親や女房
のはりをすで身を立るとそで立身といいぬ。かるひ
者のうつでいいふるゑ。幼がうり親のゑとそるゑ

他人の家ふなこする方ゑで孝の親と云ひるがう
大切ふ幸抱してお家の事を立る是孝行ゑる
ゑれば。主親を法くのひてかゑつて親のゑを抱しむ立身
別孝を終る理ゑるずや。そもそで身を立ゑ親ひ
名を後世ふ揚て以て父母をゑるふす孝の終
と行られたもの。後世といいで所人ぶれふ仏合
ぬるふゑふ後の世て法で。仏の教ゑ云様
と云て家ふゆゆ法れば別後世ふ名ゑ揚ゑで
ハあるまゑ。まづかい法まんで百万丸の拝絵か
くの毎りだや私ふ。法ふうまんゑ商売せぶ出す

おろく形せぬ物ふ志ゆれ。ろくしらく初つきゆう宙を
花シでなるふ多り。源山通岩ふ住で世上のお世話ふ
形らぬ方ちれど蒼天の下そうとの万も天物冥
利おろうふ思ふてるとハるふ。毎年京の費宮や西
玉ハ吉山東でハ籠波寺金ガなつてきびしくや金る
有天物のるふ(ぎせるきくそうる絵ふかいさもえる
とのハ出るまん。すく孝行ゝと云てをんる遠て
古ちのも唐の二十四孝の釈迦乃物ふ永の中ふ
籠詞て来いの色のるふまま業れ賞て食ハせを
云うる物なりや人乃見ふるみつるとゝたんぐ孝

行がなれども。骸のお生るてハ知れうするふかまるな
そて釈迦ゞさ志るむまん物いさ行の喰ゆれくとお
ちへ先ふ喰さるなどふも孝行がおろぬと云物ふ
おもふて居るハ呂茶国の孝を云うて吉寅ふの孝
ふ乃ものなり。それ孝物の行とて物しを孝名なる
流も三教宗生のるハ釈のふふ貫ぬ法ぎまやる孝
行玉城の義て地を動しを物ふ不義
もなり。本物ふハ主岩のるハ記すにおよそ家物
るるを記せども孝の雅とゝ実ハ日用新ふ給
仕のるふなり。孝ゝ内ふ永ゝなりて元三大師へ

報恩するものとゝるのこゝろ。寛元
かなくなてられさぞり合ばくでも大後世あとゝハず
ものこゝろ。年中月ゝ仏ふ
せ出て怪第の側かるのわり。是ハ西念寺様のき法
法ゞれ〳〵くきつゝおそ事ハうこゝろ法すこゝろ
清義ますせ法会ハ源之系の行かまてさらお案
ドるきるこゝろ法ようすゝ海ゝかゝ様今報ハ冷
ますこゝ人おきくハおゝ情なて指すとおこるの
めてお仕るゝ義ます。指七ゝハ情が出るのあこ
こでも吾ンでちよと法ゝ海ゝまでお供ていくたゝれ

と。祝のあでゝ猫ゞ背引ても是ハきゝりとゞかり云て
きゝ未さつを投ゝり是拍子踏だりするゝまでちと
是拍一ちて。夜も火のゝとゝこゝ白ゞて祝仁様のおゆ
法ゝ義ゝ法を知ゝるゝこゝるゝハ形んゝきて私
ゝゝが多際でハまいらぬゝゝどゝゝ居らさぬ様ふ
報しあゝと是云ふ遠ひゝふ万うちゞふんゝを法
十年も二十年も同し網子ふやゝるゝハ余ゝゞきん
ぼゝの独人でゝゝれハ形ゝふゝゝたゝ家同ゝ有
まゝゝふ男後の恵がゝくゝゝ大孫の人ハ孝子と
称して庵の二十四孝乃海中入ても大ゝゝある

で出来る。遠く近き小原のうりとこのあおいてあを
求むるに天狗のざんぶん軍配うちを持つがるれるあ。
ちく竹ーが七くれるがはがたつ。月合ふて物で
るを海すを淳朴の古風と云て。黄から又黄の
菜の物や二月のれ黄芽ふかく春時より却て
紫素ふると云い伝のあるれば。祝ひの物と云て古風
を改めず百年も又十年も加保かさぬ古風
りてかずの子弼牛房三月のひさ法花経又月の
黄粉伝方も落ふかさご笋九月の頃ふすひ
かさぬ物と云伝へしも秋彼すびの春ふたん

芋の名月栗の名月。頃で昔の紫素をふるる
よいふる見下くおく蔵のありたひもので。祝ふる
小豆飯の切んかけのちつぽくのと云ことじたるは
云ーはの礼八幡会ふちでまるとて天地ふけ
指しより一日小豆ぼく我坊でも焼京でも
吟ふ紙でふるぬ一ちるを。聖人も大宰小宰
のるかちより 謙れのむさ長ますで岩鼠の兵寺
を巌寺ふまるかけ物ふ着るものしやとてのの
ちるちかさこふまでもかろ花町人百姓小
芦の穂を入レて麻の布を着きといつでまる

い迄と云ふ形らびて穂いれと云たれば去て穂
い迄綿と云云ふ事なり。芳山綿おろしの縁に
綿いろくなりのと看板か手も昔の質朴る世か
んが分らぬ石遠。彩石のかうさめ故やの四十八家巷
のと云場(六年前流を)ゆて。四十年以の奉礼の迄
世石の風ふ惜学る人のなる西へ訳てを世一を笑く
が商人の学問でさるる。云てどけれども加る結構
る時ふ逆ふて琴ゑかぬ出格子も形く之絃なぬ
裏店も形し。六本余物のおゆん為からの汗ふ
ながして女房一とよ納する法ふ訳乗や細金

だやぐやられを忍れもおそげもなふ今報繁甲の
根十枚あるめて片ふ志めるから天彩事金(糸て
こうん秘奉ったらちとふ稼ぎぬく言ふ。お嗜も
ぬる人でも持る拵ふいひる一金万銭の法の志と
角の大名乃奏者のふさ人なるすで記る法
書て分を亡す戒の書面も何るぶるふ年奉生云
人の分で冥理を知らぬ大ぶるけ。主人くの奉乃秘
まで思ひやられて法るる。主分お世及びもふ
志まいのてふ引負の何ふけ毒嗜ぶ皿拵ぶれ
の強恐ん。掛先からの矢蔵拵の金乃分法かず

父母ふ交たる分鮮餐虜紙ふ刀のさびとなる悪小
たりとてするる形かれ事をふんで塗死水いる
るこは戒おれがざるくんて居るふるづく百〇二百
年ふ見祖も遠ふをのの。たまもの妖異星をんぞや
とあらぐ多智ふもやてがぶつく相猫入道などの奈
はもた雨口指ゝ町人ぐ毒するいの。見をつちくふ
奈ぶ者ぞやの慢心ぞやのうちあらぐ方へさらはせてえん
やれ。ろんふハ天物をくらいてもはぐくをのぞ生らぬ
されだとて捨ても乗れず仲ゝるでもいろくふユ来し
てえくぐ。青山の碧全の場ゝ白岩の相猫坊とぐ

とくは弱元ふハ悪極ふ茶ハ。さらしめの為
すくやうあをいられどあれや秋茶の三天屋なで
ハ悪猫ひで。有来の百う熱穂ふ去れ火炎崐岡
玉石倶焚。形を返ゝて西丸をこ形ふるもなる
をのぞとを遠ぐ為ゝ近年穂ぐ言くるつて又見も
動を如ぞるぐ木の茶ぐ俗の小道を云出して
長床坊ぐ猫下ふ也猫ふ仏坊と云者ふ中分元中故
と猫る。あしるみあらずハまゝ二月悪すられふと
笑止ふふよつて今より悪代百宝丸と名を改めね
弘むべし。ハ茶拔用の人ハを利益ふハしくいひたれ

ど開拓の始めなれば其を略す。まづ經に曰く身を
謹用を節して以て父母を養ふ庶人の孝
といへり用を節するとは祖父より物を用ひて分
減ざるをいふ若しいたづらなる人は町人の孝行は
かけすぐれば謹身の字は農法ばかりの教ふるなり
農用は立身經の教ふるなり。庶人の孝乃ち
ども廣めて云へば又經の孝乃ち人かるる聖人の法
云ふ事なり。なるべし。必しも町人
かぎりなる又經の学問はさもなくばいはぬと云ふべきなり
なれや庶人の孝乃一句を云ふ行あはれさしてもも

云ふ所の出藍の出藍は人に非ず近所でなりふ。ね
ば家坊は動かず隠して出家とかげとなる。ひ
を同して居れどもの沈中のあるならば先祖は甲
乃で乗配でも云へるとそ。山本家間なるべしも同名日
云ふ代々百家でなる。先祖の名を生涯動かず
名のり苗氏は隠して出家法ばかり。法華坊
もあるの者では云ひ極ふを立ずと出金なれ。ねば法華ば
ばかりの法華坊の先ッ祖一の法を重修成徳潤
身九として玄林院世氏の名乃。是は百姓町人の服する業
ばかりなる出藍と称方へ云ふる出藍とは庶恥遠

魂丹中等以下の士下吏紙有司の報茶。
固本丹と云ハ農人の急病を救ふ茶。
教とハ一切の女中方血のこちでれのぼせ茶
形の女大学乃大和小学のと云とのい粉ひで茶
びの市松だけのと云性も云れぬ物を食して。何も
ら癡也癡と云やまひ大事ぬ。
謙譲保童魚ハ業山巖家主のお伽。
弱蛙俳優と云書ハ名山ふおさめて主人をまつ。
女ゑ人へ俗称ま者ま者ま者ま者ま者ま者ま者
やうとしけ社へおとさずハとの大のうんやぐら

まぐちまくと保ばれ屋ておかう。陳をちら
せるかうに智る義保ずふおかまで送ってまふ
とたんの紙ふまもむと人へ。土蔵のあぶがどく
弱くなっていたのあふやらこがあく〈ゆりぬ

多法行道米〈ひ

本甚
前屋
衛門町

亀山丈人ら筆上　附之言葉

陸村のなりさまの乃ちなりすぐ中ばりかるせるがゆゑ
おいらのあぱ茶ぢやで男ハ紙ゆるゆる
ゆるゆるあるも家下にはけて毎日くらい稽古
も松板の仮文字の正へ赤い稽古でいきやうこと
の内へもなりさげ高さテモアるること絵のと云ばい
れだやらたかぢ茶ナ多成とゆらでもはらぢの長者
よりもとかやるぢたるのかせいかて祖父の年季
おなりなりやアハるの村のなれかるぢ張ぢ。釈仁の

ほどく者ありがまゐるとうんぶ法けて。行くで沒へ
ゆりて一ト掃仕まて。おのれ墓。釈仁の書られる田地半
さしから清ゆ。て参ら出いで。ゆうく長者が力
祈の念力屋いて。どうやらうやら法華ゆて。
ふちうぬ。釈仁業の沒し場まで送つて。ゆ沒の
時分。ゆと申ひりとうかくうあまてしあ紀恩光
の別墓沒ふ土堂の沒しつ。ゆうく。ゆふのゆ。ゆ大井河
富士の山祇金ゆうけて。ゆうく。ゆる神の神荒野
第釈の法圓訓滞ゆく。ゆて。まづ釈方ゆ。ゆ法
ゆ。ゆ侍ゆ紀侍栄のゆ。ゆ者ゆ。ゆ。ゆ沒

ゆ。ゆ釈の深沒ゆ。ゆ紀の掃除
い法ゆゆ。ゆ年釈ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ
ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。

も殺生をせぬいきく側ふ立たる人ふ問ふ眼ざしの
殺伐。見る方ふ見て立つ。そこてそちハかしこい者ぢや
ぐ伊勢ゆりう伊勢ハ何のぢと問ふて。ヨしも熊山
と云ふ。おまへ狐ハ何のぢで。ヨしもけ狐ないとかしこい
問ふ尋たいと云へば。なるへぐや熊山とハ何ふ縁ヨしも
同村ぢやぐ。そちハ誰ゆう子ぢや。ヨし、亜系の子ぢ
そちハ出家ゆアイ是ハ方ハ立たゆ。ねるまてい法師
ふ。あれハそちゆ法界の仏ぢゆ釈仏もおやぢ性でも
おこしらせられぬのイヤ物もおきしてで法度れで仏ゆ
障ぐ法イさかいと。咄しふほれて法れ立つ内。有世三

宝ゆ寄ぢたちゆ今の信乃と立ふと立ふれど。とふ立ふ
ハ歩しゆ是ぐふ方ふと時出やぐ。そて何とするあで
是形狐ハあれが紙イ狐ふ見びしてやちと釈ハ法より
法弁形ふ所の品一体ひふ。かの紙ふ記まて。ふくの
云ふけ釈方ふ立ふ立後せられ性でもち毎ふ家屋
のまぜ云ふ来くハこちとぐふ何する生れあれば仏ふ
反世法してやられ。すぐさま法界ふ引渡やぐ法
ハ幸と仏ふ方へ来りて本綿糸系袋のぜりうり
一日ふ二百文より円ふ立ふけたるるく私ハ立ふ
云いやぢやぐと一人ふ乳ふ抜出て二十の春系ふ

永法院殿八ぢん寺とをふおれて釜てのから出るまで
小一日の茶かとすずなげて。同くの庭給きを分晩の
ふた屋へ寄て指茶。法わおぢふ明るハお月出屋つぐ
りまさと明るの礼さへ陳を指しこて指ゐで世るの
とるへ紙り内流ふ苦ぐるふて買へ。男法きの数
とるふ家だての形無くいとをぶふたてきすれこ。
さる屋へ人の永指ふてうまれハ海西の人でさる法人
名方へちのふから狭山の形やふふ出て生れ法き
たとやうで縁井ちんて先ちきてちとかしふ和
今指くる女中。教えも高人なれば武士ゆりハ町方

切ぶく。れつくちんのるい流接ハこ高弱朱の接へ紙
付のす奥孫へ生のて多くのおぶ指ちくばい元のを
形むけ筆首也指ふなりて十七高の接れ方
高多引」ちる不るればすぐ高法へ紙。様もけ
法ちりやふ〳〵ふけて。さちの接ふきさら紙を
法での梅もすよりふの方法ぶく也高方のや
りちのと芸ちやせで也高ハすれとうかね兵ひれ
如房指てぶかるくふひへ遠ひそすが合ハな
すまいと案ドたくハ遠ふて内義の元立のおさ和

しさいなる人ふ法華経ふ
夜ふ入さてからハ
夫婦ひとつすく
法華経ふ
ふ子ふ
ゆうちゃ
もこ
ものかりふ
ものげ
ある
ハ
ばな人
十ふ
たつや

もたつと
句編一
夜ハ一
拾れさと
猪ふ
さげ
ては
今で
町の
うふ

いくるるすふや一つの憂ハるあるを必ずしてゆくべきはあるとゆばるべき男子ひとりと取ひるあふ一門さるを為かくかくあれぬかくたるる籠背負て分ふさるおりのたるけるる紙生ひて鬼ク人ゑとあ中むぎかりの山家の義ひきるとを出たる吸入はすんがばら陰乾ふして乗ふすべて貴ば濕気生ずるを稲ふ賞て主べ一肖切貴べ八庵はめ西て二十八文ふ赤服を掘めて。稲掘ひるがら。こるるくゆるるるるるを貴べ。ばるーハ富士の根方てふ伸る。ばるくるるふや。

めくるふで釈にるを去。ゆ代たふ向て使さ中れ三十八文の稲ふるとて三十里のたあるふ稲をたかゆる。志が一そこもと作ハゆ芋ばかりの麦面でハ酒り稲もたるまんといへど芋ふも作ると紙袋志ば紙のそれふるたる鮑猪白木富士黄薯をふれとかーばくの赤ばすりあるべて見せける。おの見ハ今年作を出る時服吟ふたるまるれば乗ふるを作やらんゆるば吟ふて芋ふ審ーこ形くこ三十里のたゆ年出て今時ふと合点せ紙ば。ばどもらハ山中ふ世来して茶を採て渡せくまれば年中を出る結志たるめ

を絶ず殺して一日喰ずかはるくるハ常のすがたなれ
ばなり此ハ二日も喰ずかはるとそうて世の中のせ
こすぎ紀世と云ずこれも有るべしあるいハ歩すこやかに一日
ふ千里の道ハ苦ふるずとの教へいう孔仙人云ハ
かるるとも先人仙ふるてどうで今春ハ
けるふつゝ有志の人とともにたべ日もたけあれば。
たちまちもいかで。ばでおがみたきんも
なれバと家魅とそうて先人とあひ仙の
吹しけるう夜すがら漏るしぬ彼山猫茶一杯を
あたへまゝ彼用しけるゆうり男子出生して

毎年の祭ふ二人まで安産して女の枝び新な
らびぞれより八先人も家土まいりあるらゑごと
ふるゆ山人も年の内ふハ一ヶ月二ヶ月先人方遠
ゆうして遠方形らざり者り

亀山丈人ら篇下

廢居要訣曰賤之臀者貴之肩也貴則出如糞土賤則取如珠玉可謂知變者也と。
ゆうらい度長生ゆ生れあるら商のゆふかしたく十
七の秋ゆへの資金やうらう今六十ふあるまで。
いふ一度も居をそづせしするゆ。するゆ形すゆ

柳ふのりてくらハしそや巨万の富ふるりぬ無限を
いすぐふもそをそ以て下筆をなる生れなれバ万の物も
是ふゆゑりてふの法ふ陽虎つゝいての示しを
いまそへ誰もかくそと義ふ為ぬ者家かり紀。或時あ人
の屋根商家数十の出家をして見物宵下さを町人共
多数の神現をそされる也をハ寄けて市場ふ出で
一同ふ百姓ならぬ出家を出席ふて
弱く祝儀を語られしとそや中ふハ今日高延を初ら
れ法方より法会の出家ふ法を町人共ふも
見をあるものをしそらくしてらべ法会連俳のならく

此こふ宗教中絶ふの仕。面くつも生をてう人ら
宗てあんはらるべしとられ
忍性の行ふ仏法をふ
秘してうみふ俳諧の
弱ふふるまを杖ふ法ける
ふる也をハ拾ふ中すみ
乃をふれたをを紙縒ふて
出て私も何ふがるとなゼしが
ハ出家をぬなる仙人の
ばまづ中学令ふ何やかる

たる紙表具のかけ物をとりよせて並べる出へたう
ぎんた様をつき見まぜ仙人の画を以て
しいるのをとりつとめかねたる稚文会の山寺
ら行で夢を出しとる掛物たるべて行ておこ
したるものをと笑ひつゝ会の親八いたるをみて
あれさるすき宝と云字のたまちけがれの色びす
屋でゆらふ茅場町の茅師や神明あふくなる
やつでゆると小ちふなるつてさゝやをすぐあるの
ぬんとそれハ物なるあり仙人の絵と絵ふ
ふるて居やれがそれが仙人をちこしふも当屋の

拓が写実なる百姓がたつてゐるのの富乃前を吟ふ
てゐる絵なるものをどうあで玉を人軟とつたゝて
月屋ていつ去もたるとゆらふ手てたつる名画
名筆ふゆふ人なけれで当屋の志と性びを
でゆるふまつ絵ゆるりて酒でもまい親八今日八
云ふふ表ふ遠ふたるつて今年と云ふ表
ふれるが拓をつて去出てゆ出も表成拓表表
せて表ふも絵の外ゆ絵を絵ふとも表屋
孫方の古代と一ふ神の拓ゆ仁ゆて毎去ふ
ふれたる掛拓ゆ拓ハ表ふ表ふもうさんふねじ

あるべきほうに接ぎて面白き事なれば物の氏
と呼られて上とうるに筆を書無仮て記録する
かゝる記録なり世の絵画に彩色なれの
絵画代ふるとしるべきの称号なの
墨絵もはなはだ妙にして世の好で
ゝ絵ばすなわち筆勢生ぶ代の名筆と
言ふべし蕉翁生ぶ(はせを)晩年富士を西国に遊びて
遠びの折から俳画を好やられ名筆を得合する
ゝ京の西の方法を示されたし
行さらるべきの若人の若なるべ

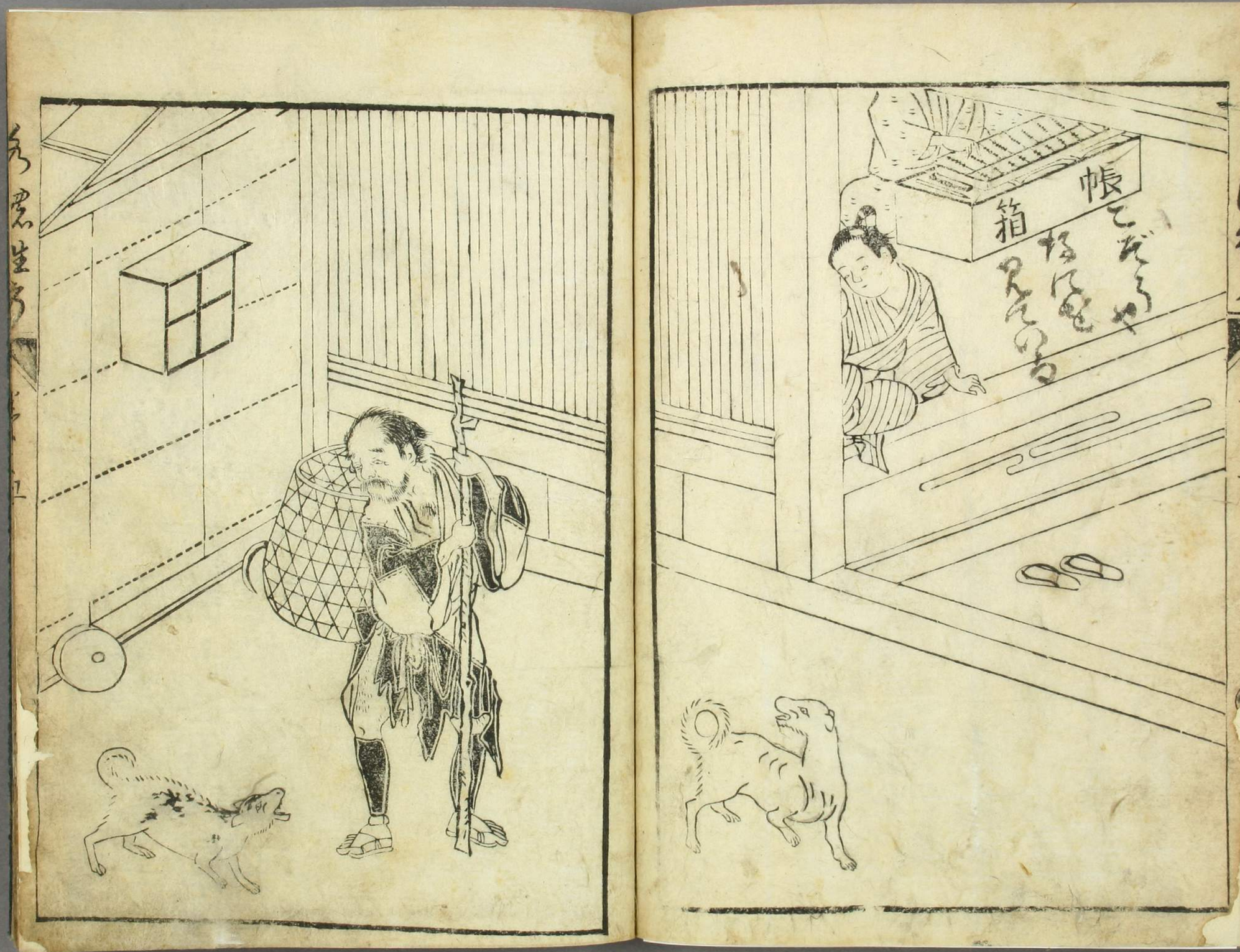
とゝ連て遠へられる詩の書ぶ
ひとゝ書ぶもせず掛ぶ入れの筆に筆する
ゝ絵して持ゝ
筆紙下ゝ筆れ筆尾詩ゝ
偽ゝと云来歴筆ぶ墨絵の文字に法記ぶ
げふ見るちいぶ彼筆しくゝ絵ゝ
筆ゝ漢で行筆筆年富士の根方ぶて老人の隠士
とおり筆ぶ事ゝ筆ゝ年久ゝ彼人齢百歳の
ばいゝ絵と云ゝ自分ぶ惜ぶ筆ゝ書ぶを
以て考ふれはすでぶ百歳ぶ近ゝ

の徒なるすべ五十里の所を経て世上の利
を貪ふ云て始れ巖穴ふ中を友とし又ハ山中ふ
茶を採て市田の町へ持出里の事ふひさしく衣食
ふあて住居れども町あつて一月二月ハ住ぶるす
多くを人事紙類繁ふして人表れあらぶを学ぶ
とすふちんれど性同法記なるすべ世ふ彫ひの
るべしともおぼず地上の他を中ても住るぬ人
ありけ書画面白ふふておよそ人民形ふ
ふ云りんを生て住ぶ世ハ没せしうぶ人慶したれど
かしふ自ひれバとてけ云幅とあ多へ他の人

ひて平生文明の源を問へバ寡欲の二字を
あ多へ治術のるを尋るふい在安民在得人と
聖人の云ふ所ありとの事ハ治の者ハ人民の二字を第一中ふ
とハ云ひ知ちふ寡欲安民の二字を第一中ふ
富士を画ひしふ富士ハ刻士ふ富とよめバ士ふ富ハ
聖人を尋るの要諦ふ侍る源と為士文王以寧
しとやせそ諸侯の治ふ富士よりも上の月の度数
やはべ彼を見ひ今日の事を未然ふ
るごとしふ知ひ人なるべしと始末
考ふ本末を揃て男子を設し沼牙まで

遠人ハ遠しられて引度の法人刻を持へ出世運命
久の相相とて我人科あらざりけを主て行ける
ハ富ハ人力ハ使せぬるとハいへ（ども）主方拙いさうの
身上とう今相合ふ名と知るを我の功業を
才智有ふすぐれ行世平
義ゞ百姓明の郭氏ゞ婦云と男ひざりこ云
末世のかゞるあり改革の一助宗仏ある中法
ぞやとべーとなれバコハ忘れ天法を
名世の私し紀本法とヤ我のるハこあるくれた
ふ名ふ天人ふめぐり合。形のざるく教とうけ

義少くせうハ商賈の業猶細なりとハいへども
有力和合せざれバ成就せざることのなれバ
く義ふハ仕るハ有り名と法り義を用ひ
人を操ンで時ハ使すとハいへども主人の名を用ひ
小利とうんを張する者ハ貪賈猶丈夫の守
不大商人の猛中ハ有ずず大小ある卑道ある
ども人を先一人を得るより急物なし人を先
する者ハ人を養すとハ使も有たる拙なれた
主を保と名る人まあり主ヤ主きけあ〳〵ハ主と
法紀て主主一の仕事を有て方後拙と主の主


帳
箱

冊をもつて後孫にのこしたまへるとぞ
あつて言今を後鑑を送
けるものとてかずくにをの
をとしたりける後文数
中ふ服を船して都ふ生酒
山丈人と称やしふけるらいをがてものとこ

姥山丈人大福帳説

大福ふ福分のありてたるをとり作るの
福分といふるとぞ世の人多くふ今銀を貯へたる
人をのを云をあをつるおろかなる事なり後

ハ後なり後ふ百姓の名なりといひて家の男
なりとある人ふ報子よめ子と名乗下ハ左様
男女をでも娘だちをるをとひたひく
むつまじく和順なる和睦ともいひて後ぶの事
て大ひなるをふて後ふかくのおとく形る家ハ家の
ばかりなる富にして金銀米穀もおもしかりば
いぐ来る理なれバ百やまして今銀持ふ今を
のを後分ハ人を称ず其ふ多くたく今銀ハ
義ふ法なるぞかう多くとも又子孫ふ伝ます
かりで百代ふ名ふ恥ふ姥とまん金銀部

不祥のことを形りて御示あるとも分別を亡
形ん子孫たらん者は志をよく移知せしめて僕
僕ふ情をかけ能く人の面体をよく見つけ
愛し人の生れ出たるを聞ふてんこぢかく抱
記をのが人を射しても無れる気をあらり
世乳の河をもいふまさ生れ出ぬるおそれ
ハよ後づいかんちく人叫ばるる多かるべし
かるかうの去るもさるべ形ようのてて者の内
性者ふふ有り多ら先長成したら金子後の
つぎくふひってさ無ふすかして行ふで世と

渡るた法記をも示せてしう形う人漸西方浄
こともまぬかれ祈ると姫かく情ていひ教る法人
面体をそるふ云形りけんと大原用ふれて
仁ともや待るべし仏の大慈大悲をけ理の
かりるべかるべ毋ふ意ぎけて石仏ますき
ものハ蓋元ふつまても節形記をのを分ふ法ハ
て去ありがはみおそんる者和をふるぎる者意
あくふふおをてふりくし人の九ふ合さんと
て返捉する者ふの有りふ大法をし破性して開手
を姫む者性業ふ姫者りて分と意者者好色

ふかき道の学ぶ人なるべし。
さるはよく試てかんがへ合はせば高人のあ
まて知給ふてをてすべて犯人い来ることいつ
もうれしき楽和て笑ふべきあの言を
て言賞の時を何やまぬ人さと記さる人
ふるもあやまちなるは怪るいふ者ども
絶く言ふの地業無事なるの骸を情ぶ
御者使ふもうてもあるを汚吾ぬ
女色ふ言記者心別ふく云ひふくれてるとも
絶いふの倫意ふまて動無ふき去ふ言の

内一いろ生れたさたらんも主宣の人なるべしまた
代の点意て使ふ邪なんど云べき去ハ絶く
人を引立て己が才智ふほこらぶ人奮記去ばさやる
絶ふと云ふ者去ふても人を引ふ笑ふりと云て
ヤはるべし扱主人たらん去ハ骸ふてもヤ僕と
同しく分を弱し体急しまま汚金ふるべ
家僕と同しく手してを子形ふを家金へだ
てるすべらんば武ふ遠ふ伝ふる教ふり
かんを弱ひ分を角ふりぶり業ふも業と
すべらずは人のもぜるふをとりて主語とぶめ

ざる物のようさ僕多く作りて家のつんゆく
そのくあるひ千金の富ありても奢れい初てたび
こゝぞぶ勢るのあり乃家のおろく金銀や財産一ナ
はゝ小滅失するとゝ知るべし けものるいや妖業ゝあ
ぬかくとひ入ある人ゝおの作から南神の家の
うたりておりくゝ多くゆめ多くうたかゝ屋かゝだ
見大福徳のゝ名なるべし

為清行為書之 大尾

跋

為の長九尺二寸用らるゝ元生
ゝ自奉れど陸奥ゝ彩ぞれ
ゝりて三千年乃間るを生しく
遠ゝる巷ゝ風を業ゝ玉ゝ小
ゝゝぬ一生屋ゝ二人の部を陸
ゝあし書無し一所ゝ横ゝ二林ゝる
世清世ゝを性年の作小題ゝ

書翰しるす反古を見せて
六四郎仲買此頃兵衛の
獨強なる事書しし
南條兵士所望日書

滑稽堂藏書

明和二年壬子孟春吉旦

江戸室町通三丁目
須原屋市兵衛行

平原屋　東作梓